

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520046

研究課題名（和文） マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地の研究

研究課題名（英文） A Study on Hindu Pilgrimage Sites in Maharashtra

研究代表者

山口 しのぶ（YAMAGUCHI SHINOBU）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：70319226

研究成果の概要（和文）：本研究では、現地調査とサンスクリット文献研究により、インド、マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地、特にシヴァ・リングを本尊とする寺院に関してその宗教的機能を考察した。具体的にはグリシュネーシュヴァル寺院等、同州に存在する5つのリング寺院の歴史と現状を調査するとともに、儀礼において僧侶たちが使用するテキストや、寺院の由来やそれに関連する世界観を述べたプラーナ文献等の検討を行い、これら巡礼地の現状と機能を考察した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I considered religious function of Hindu pilgrimage sites, especially temples of Jyotirlingas in Maharashtra, India. The study consists of field work and philological study. In the field work, I investigated the five Jyotirlinga temples such as Ghrishneshvar Temple in Maharashtra. And in the philological study, I examined Puranas and some ritual manuals written in Sanskrit used in the temples by the priests. I considered the present condition and the religious function of the Jyotirlinga temples with the results of the field work and the philological study mentioned above.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：ヒンドゥー教、リング、シヴァ、ジョーティル・リング、巡礼地、プラーナ

1. 研究開始当初の背景

ヒンドゥー教寺院における信仰の実態に関しては、特にバラモン僧の儀礼行為を中心に従来から研究がなされてきた（例えば Rangachari, K., *The Sri Vaishnava Brahmins*, Madras, 1931, Gourdriaan, T., *Vaikhanasa Daily Worship*, IJ12, 1969 など）。また日本においても、

立川武蔵氏、永ノ尾信吾氏らにより文献研究、現地調査を踏まえた詳細な儀礼研究がなされてきている。さらに北インドの聖地についても宮本久義氏らにより研究が進められている。一方マハーラーシュトラ州の巡礼地に関しては、ヴィシュヌ神と同一視されるヴィツタル神の

聖地パンドルプールの研究がある (Deleury, S. J., The Cult of Vithova, Pune, 1994)。しかしながら、マハーラーシュトラ州のシヴァ神の複数の巡礼地を取り上げ、巡礼の社会的機能等を現地調査、文献研究両面から詳細に分析、考察した研究はまだほとんど行われていないと思われる。報告者はかねてよりインドのヒンドゥー教およびネパール仏教の儀礼と図像に関して研究を行ってきた。平成15年度より17年度までの科学研究費補助金による研究「マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教の儀礼研究」(研究代表者山口しのぶ)においては、マハーラーシュトラ州のバラモン家庭で結婚後5年間行われる「マンガラ・ガウリー女神供養」を現地調査およびサンスクリット文献研究からその構造を分析し、また社会的機能について考察した。以上のこれまでのヒンドゥー儀礼研究をさらに発展させる形で、マハーラーシュトラ州のシヴァ神に関わる巡礼地研究を行った次第である。

2. 研究の目的

本研究は、インド、マハーラーシュトラ州におけるヒンドゥー教巡礼地、特にシヴァ・リングを本尊とする寺院に関して、現地調査と文献研究により現代ヒンドゥイズムの巡礼地の現状と社会的機能を明らかにするとともに、ヒンドゥイズム巡礼地における汎インド的要素と地方的要素の相違および両者の関係性を明らかにすることを目的とする。本研究は、マハーラーシュトラ州にあるシヴァ神の巡礼地である12ジョーティル・リングを調査対象とする。12ジョーティル・リングはインド北部ウッタランチャル州から南部タミルナドゥ州までの地域に点在するシヴァ・リングを本尊とする12の寺院であるが、そのうちマハーラーシュトラ州には「ヴァイディヤナータ」「ビーマシャンカル」「ナーグナータ」「トリヤンバケーシュヴァル」「グリシュネーシュヴァル」の5つの寺院が存在する。また12ジョーティル・リングに関してはプラーナ文献、特に『シヴァ・プラーナ』第14章から33章に詳しく述べられている。以上の寺院と文献研究に基づいて、これらのジョーティル・リング寺院におけるリング信仰の現状と巡礼地としての機能を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は2008年度から2011年度にかけて行われたが、研究方法は一貫して(1)現地調査、(2)サンスクリット文献研究の2つからなる。以下が年度ごとの研究である。

初年度である2008年度の現地調査につい

ては、8月および12月にインド、マハーラーシュトラ州に出張した。8月は12ジョーティル・リング寺院のうち、グリシュネーシュヴァル寺院を調査した。当寺院で行われているリング崇拝の儀礼を観察し、その構造と特色を考察した。また12月の現地調査においてはマハーラーシュトラ州のその他のジョーティル・リング寺院、すなわちヴァイディヤナータ、ビーマシャンカル、ナーグナータ、トリヤンバケーシュヴァルの4寺院およびアーンドラ・プラデーシュ州にあるマッリカルジュナ寺院を訪れ、映像資料と文献資料の収集、および各寺院の僧侶への聞き取り調査を行った。また文献研究に関しては、『シヴァ・プラーナ』等のプラーナ文献に述べられるシヴァ・リングの崇拝形態および12ジョーティル・リング寺院の縁起について記述された内容を分析し、シヴァ・リング崇拝のシンボリズムに関する考察を行った。

2009年度は、8月にネパール、カトマンドゥ盆地において現地調査を行った。この出張はカトマンドゥ盆地に存在するシヴァ神を本尊とする寺院における信仰の実態を把握するとともに、マハーラーシュトラ州のシヴァ信仰との比較を行うことが目的であった。調査対象はパタン市のクンベーシュヴァル寺院であり、同寺院の施設や儀礼等について映像資料収集を行った。またカトマンドゥ市においては、シヴァ・リング信仰等に関する文献資料を収集した。文献研究に関しては2008年度に引き続き、プラーナ文献におけるジョーティル・リング寺院の記述を中心に内容分析を行った。

2010年度も2009年度と同様、8月にネパール、カトマンドゥ盆地に出張し、パタン市のクンベーシュヴァル寺院等を調査したが、それに加えて、カトマンドゥ市郊外にあるシヴァ系の巡礼地で行われるヒンドゥー教の祖先儀礼を調査し、同地域でヒンドゥー教の影響を強く受けるネワール仏教の祖先儀礼について比較検討を行った。カトマンドゥ盆地においてもシヴァ系の巡礼地はポピュラーであり、特に祖先儀礼を行うべき日には、ヒンドゥー教徒のみならず、ネワール仏教徒、さらにはチベット仏教徒が集まり、各々の儀礼を行うが、特にヒンドゥー教徒の祖先儀礼がネワール仏教徒の祖先儀礼に多大な影響を与えていることが明らかとなった。

2011年度においては、8月にインド、マハーラーシュトラ州プネー市およびネパール、カトマンドゥ盆地に出張した。プネー市においては、パンドルカル東洋学研究所図書館において、『シヴァ・プラーナ』のヒンディー語訳テキスト等のコピーを入手した。

また文献研究においては『シヴァ・プラーナ』に述べられるグシュメーシュヴァラ・ジョーティル・リング寺院(現在のグリシュネ

一シュヴァル・ジョーティル・リング寺院にあたる)の章の和訳作業を進め、翻訳上の疑問点等をプネー市在住でデッカン・カレッジのディクシヨナリーセクション研究員のマードヴィー・コラトカル氏に質問した。

4. 研究成果

(1) プラーナ文献のジョーティル・リング寺院の縁起譚に述べられるシヴァ・リングのシンボリズムについて以下の事が明らかとなった。

シヴァ神のシンボルとして、リングは男根の姿で表され、ヒンドウイズムにおいてリング信仰は中核的な位置を占める。最初にリングとシヴァ神の結び付きが確立されたのは、インドの叙事詩『マハーバーラタ』においてであるとされる。リング崇拜の背景には、「支柱」(世界軸)としての原理、および男根に象徴される生殖行為から派生する「生産」「豊穡」のイメージが存在する。『リング・プラーナ』においては、宇宙の始原についてブラフマー神とヴィシュヌ神が言い争っていた時に巨大な炎を放つ火柱の姿をしたリングが出現し、その中からシヴァ神があらわれ、両者を圧倒したという記述がある。そこに見られるリングは宇宙を支える巨大な世界軸としてのイメージを持つ。

一方、『シヴァ・プラーナ』第4巻、第12章には以下の話がある。聖者に悪さをしかけたシヴァ神に腹を立てた聖者たちが、シヴァ神の男根を切り落とし、それが地面に落ち、落ちた地面の周囲を焼きつくし、その火が世界中に広がり世界が焼け落ちた。ブラフマー神は「シヴァのリングが安定しない限り、三界に吉祥は存在せず、シヴァの妃パールヴァティーが女性器ヨーニの姿をとればリングは安立する」と語った。

この話では、『リング・プラーナ』と同様に火であり、また世界軸としてのリングの性格の他に、男根のイメージが述べられ、「支柱」と「男根」の2原理が結びついている。

本研究で取り上げた12ジョーティル・リング寺院の縁起に関しては、シヴァ神を礼拝する人々の前にシヴァが来臨し、彼らに乞われてその地にリングの姿で留まるという内容が複数の寺院縁起で見られ、この縁起譚の特色となっている。例えばマハーラーシュトラ州のナースイクにあるトリヤンバケーシュヴァル・ジョーティル・リング寺院の縁起では、ガウタマという聖者が10万個のリングを造りシヴァ神に祈ったところシヴァ神が来臨し、ガウタマの罪を消し、さらにガンガー(ガンジス河)女神を呼び、シヴァとガンガー女神はその地に留まって、そこがトリヤンバケーシュヴァル寺院になったという。

これはいわば中央の伝統であるシヴァが地方に広まる際に、おそらくシヴァ信仰が広

まる以前に存在していた土着的要素を含むリングという姿を取って定着するということを示している。

ジョーティル・リングの縁起に今一つ共通して現れるものは「水」である。前述のトリヤンバケーシュヴァラ寺院縁起にもガンガー女神という河の女神が登場するほか、ラーメーシュヴァラ・ジョーティル・リング寺院縁起においても、海に面してリングが建てられ、またシヴァ・リングをガンジスの水で洗う者は解脱ができると説かれている。

以上に見たように、リングは世界を支える柱、あるいは男根から生殖、そこから派生する世界創造のシンボルである。それに加えてこのリングと水との関わりにおいて、火としてのリングと水という2元素の結合は、生殖行為とはまた異なった意味での一種の世界創造のシンボルを示していると思われる。男根、生命力としてのリングのイメージは先行する研究でも述べられるが、火と水という関連でリングのイメージが語られることは従来無かったと思われる。この点について、成果として論文を発表した。(雑誌論文③)

(2) グリシュネーシュヴァル・ジョーティル・リング寺院を中心とした現地調査と関連文献研究により、ジョーティル・リング寺院の現状とその神話的世界観について以下の事が明らかとなった。

報告者は2008年8月にマハーラーシュトラ州アウランガバード市、エローラ地区にあるグリシュネーシュヴァル寺院の実態調査を行った。この地区一帯はヴェルール地区とも呼ばれ、かつてこの地域はイェーラと呼ばれる王によって支配されていたとされる。「イェーラ」とは寺院付近を流れる川の名称でもあり、この川はマヘーシャードリ山から発し、エローラ第29窟横で滝を有しながらグリシュネーシュヴァル寺院方面に向かって流れている。

この川について、以下の由来譚がある。すなわち、太陽神スーリヤの子シャラドデーヴァが息子の誕生を求めて供儀を行ったが、僧侶の不手際で女兒が生まれた。その娘はヴィシュヌ神とブラフマー神の力で息子に変わり、スダンヴァと呼ばれるようになった。だがシヴァ神の呪いにより再び女性に変えられたスダンヴァは厳しい苦行を行い、満足したシヴァの恩恵によりイェーラ川となった。以上のように、この川自体シヴァ信仰と結びついている。『シヴァ・プラーナ』において、グシュメーシュヴァラ・ジョーティルリングは12ジョーティル・リングの最後にその名が挙げられており、現在その寺院にあたるグリシュネーシュヴァル寺院も巡礼の12番目に参拝するべきとされ、この寺院を参拝しなければ巡礼が完成しないといわれる。

この寺院においてリング供養を観察する機会を得た。そこにおいて信者たちは儀礼に先だって「シヴァ・アーラヤ」と呼ばれる沐浴場で沐浴した後、この寺院の本堂に入り、リングに花、灯火、米、牛乳などを供え、水瓶の水を注ぎ、リングに額を付けて礼拝する。この水瓶の水を注ぐ部分は「アビシェーカ」と呼ばれる場合もある。このリング供養は現代ヒンドゥイズムで頻繁に行われる形式をとっており、ヴァーラナシーで刊行されたサンスクリット儀軌にしたがっている。ヴァーラナシーにはインドで最も重要視され、また12 ジョーティル・リングの1つでもあるヴィシュヴァナート寺院があるが、グリシュネーシュヴァル寺院はこの儀軌にしたがって儀礼を行うことで、マハーラーシュトラのローカルな伝統というよりも、むしろ全インド的な伝統を基盤として宗教行為を行っていると考えられる。

この寺院の縁起は、『シヴァ・プラーナ』に述べられる12番目の寺院縁起を基礎としつつも、イェーラ王とシヴァ・アーラヤの話など、ローカルな記述を含んだ話とより深く関わっている。またこの寺院を取り巻く環境には、エローラ石窟のヒンドゥー寺院、イェーラ川など、シヴァ神信仰の要素が多く存在している。グリシュネーシュヴァル寺院の存在意義や特色を考えるにはこの寺院のみならず、これらの周囲環境をも視野に入れる必要があると思われる。さらにこの寺院の住職によれば12 ジョーティル・リングのうち他の11のリングがすべて北向き、すなわちシヴァ神の住処のカイラーサ山を向いているのに対し、グリシュネーシュヴァル寺院のリングのみが東向きであるという。この寺院の東にはエローラ石窟が位置しており、以上のことからこの寺院のリングはエローラのカイラーサナータをカイラーサ山に見立てているゆえに東を向いているのではないかと考えられる。

以上のことから、エローラ石窟のカイラーサナータ寺院、イェーラ川、グリシュネーシュヴァル・ジョーティルリングは、このマハーラーシュトラ地域において、一種の神話的世界観、すなわち「カイラーサナータ寺院＝ヒマーラヤのカイラーサ山」、「イェーラ川＝ガンジス河」、「グリシュネーシュヴァル・ジョーティルリング＝ガンジスの水を注がれたリング」という世界観を創出しているのではないかと考えられる。

以上述べてきたグリシュネーシュヴァル寺院の調査は、ローカルな地域において、インド神話のような大伝統の世界観がその地域の環境に合わせて創り出されるひとつの事例を提示するという点で意味があったと思われる。以上の点については、成果として学会における口頭発表、および論文、図書を

発表した。(雑誌論文②、学会発表②、図書②)

(3) 今後の展望

以上、本研究で明らかになった点について述べてきた。本研究で扱ったジョーティル・リング寺院は、ヒンドゥイズムの大伝統に含まれ、現代インドにおいても巡礼地としての機能を十分に果たしている。ジョーティル・リング寺院を参拝するヒンドゥー教徒たちにとっては、これらの寺院を順番に巡ることが明確に意識されていることも明らかとなった。しかしながら、まだ継続して研究を行っていくべき課題も多い。本研究は現地調査と文献研究両面から総合的にシヴァ神の巡礼地の性格と機能を考察することに特色があるが、グリシュネーシュヴァル寺院では詳細な調査を行ったが、その他の寺院では調査が断片的になってしまい、まだその性格をはっきり把握したという段階には至っていない。ヴァイディヤナータ寺院など、運営上バラモンのみならず非バラモンの人々が関与しているという。このようなジョーティル・リング寺院の非バラモンの要素に関しては今後さらに研究を続けていかなければならない。またマハーラーシュトラ州のジョーティル・リング寺院とその他の地域のジョーティル・リング寺院とを比較した場合、どのような相違があるのかという点についても今後の課題として継続的な研究を続けていきたいと考えている。研究当初はジョーティル・リング以外にマハーラーシュトラ州の8 ヴィナヤク寺院の調査も念頭においていたが、寺院は観察したものの具体的な調査は不十分に終わってしまったので、この点も今後の課題である。

シヴァ・リングの信仰はインド、ネパールのみならず、かつて東南アジアのヒンドゥー教が広まっていた地域、すなわちカンボジア、ベトナムのチャンパ、タイ、インドネシアのジャワ島などにも存在していた。バリ島においては、現在でもリング信仰は盛んである。将来的な研究としては、インドから伝播したリング信仰が東南アジア各地の固有な信仰形態とどのように結びついたかを明らかにするという点も視野に入れて、今後研究を進めていきたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 山口しのぶ 「ネパール仏教の死者儀礼」『日本佛教学会年報』75号、査読有り、2010年、pp.99-111.
- ② 山口しのぶ 「12 ジョーティル・リング

寺院について—マハーラーシュトラ州グリシュネーシュヴァル寺院を中心として—『印度学仏教学研究』57巻1号、査読有り、2008年、pp.262-268.

- ③ 山口しのぶ 「南アジアの寺院縁起—ヒンドゥー教シヴァ・リンガ寺院の神話と巡礼—」『アジア遊学』査読無し、2008年、pp.32-41.

〔学会発表〕(計2件)

- ① 山口しのぶ 「ネパール仏教の死者儀礼」日本佛教学会 2009年度学術大会、2009年9月16日、立正大学。
② 山口しのぶ 「12 ジョーティル・リンガについて」日本印度学仏教学会第59回学術大会、2008年9月4日、愛知学院大学。

〔図書〕(計2件)

- ① 山口しのぶ 「マハーラーシュトラのヒンドゥー教」『朝倉世界地理講座 南アジア』(立川・杉本・海津編)、朝倉書店、(2012年6月刊行予定、現在印刷中のためページ数は未定)
② 山口しのぶ 「光り輝くシヴァ神の聖地—リンガ寺院の神話と象徴」藤巻和宏編『聖地と聖人の東西』、勉誠出版、2012年、pp.452-472.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 しのぶ (YAMAGUCHI SHINOBU)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：70319226

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)